

PRsj

PUBLIC RELATIONS
SOCIETY OF JAPAN

NEWS

2022 年 1 月号

NO. 336

TOPICS

新年にあたって

(公社)日本パブリックリレーションズ協会 理事長 畔柳一典

MESSAGE P4

「PRアワードグランプリ 2021」表彰式・プレゼンテーション開催報告

ATTENTION P5

日本PR大賞が決定！！

ATTENTION P10

新春PRフォーラム 2022 開催案内

ATTENTION P11

広報・PRスキルアップ実践講座④ <デジタル危機対応> 開催

ATTENTION P12

公益社団法人日本パブリックリレーションズ協会

〒106-0032 東京都港区六本木 6 丁目 2 番 31 号 六本木ヒルズノースタワー
5F 電話 (03) 5413-6760 ファックス (03) 5413-2147

URL <https://www.prsj.or.jp/>

関西支部 〒530-0003 大阪市北区堂島 2-1-27 桜橋千代田ビル 3F
電話 (06) 6344-3002 ファックス (06) 6344-3005

発行人: 畔柳 一典

1月号目次

12月～1月のスケジュール	—	2
MESSAGE(メッセージ)	新年にあたって	— 4
ATTENTION(お知らせ)	「PRアワードグランプリ2021」表彰式・プレゼンテーションライブ開催報告	— 5
〃	日本PR大賞が決定！！	— 10
〃	新春PRフォーラム2022開催案内	— 11
〃	広報・PRスキルアップ実践講座④ <デジタル危機対応> 開催	— 12
BULLETIN(活動報告)	2021年度第2回なでしこカウンスル開催報告	— 13
REPORT(講演レポート)	第218回定例研究会(正会員・個人会員限定)	— 17
協会掲載記事	PRSJ in Media	— 18

1月～2月スケジュール

【オンライン】「新春 PR フォーラム 2022」 特別講演	日 時 : 1 月 20 日(木)16:00～ 講 師 : 一橋大学大学院 経営管理研究科 客員教授 名和高司氏 テーマ : パーパス経営とパブリックリレーションズ
【オンライン】第 38 回 広報ゼミ	日 時 : 1 月 17 日(月) 16:00～ テーマ : 最強広報組織のつくりかた 広報組織における多様性を考える(3社 ご登壇:事例をもとに共に考える)
【リアルとオンライン】 APIR フォーラム 景気討論会<関西経済 編>	日 時 : 1 月 24 日(月)16:30～18:00 テーマ : ウィズコロナの関西経済を考える ーコロナからの経済回復を和歌山 県の実例からー
【オンライン】 広報・PR スキルアップ実践講座 ③ 「マーケティングPR」	日 時 : 12 月 10 日(金)～1 月 31 日(月) テーマ : マーケティングとデジタルPR ～PRにおけるソーシャルメディア活用のポイント～ 講 師 : (株)トライバルメディアハウス 代表取締役社長 池田 紀行氏
【オンライン】 新任広報部長講座 2021	日 時 : 12 月 21 日(火)～2 月 14 日(月)<予定> 講 師 : キッコーマン株式会社 コーポレートコミュニケーション部長 臼井一起氏 テレビ東京 執行役員 八田亮一氏 西村あさひ法律事務所 弁護士 鈴木悠介氏
【オンライン】 危機管理広報集中講座	日 時 : 12 月 16 日(木)～2 月 7 日(月)<予定> テーマ : 危機管理広報の基本と実践 ～危機管理の原則と緊急会見・必須ツールを学ぶ～ 講 師 : ゼウス・コンサルティング(株) 代表取締役社長 白井邦芳 氏 株式会社トラストワークス 代表取締役 風間 武 氏
【オンライン】 広報・PR スキルアップ実践講座 ④ 「デジタル危機対応」	日 時 : 1 月 14 日(金)～3 月 7 日(月) テーマ : デジタルリスクの解析に基づくネット炎上防止のポイント ～安全なSNS運用のために広報・PR部門がとるべき対応～ 講 師 : (株)エルテス コミュニケーション部 部長/デジタルリスクラボ責任 者 江島 周平氏

1月～2月の理事会・委員会・ 部会スケジュール

定例理事会	(1 月度)	日 時	: 1 月 13 日 (木)	16:00～17:30
		会 場	: 霞会館+オンライン開催	
	(2 月度)	日 時	: 2 月 10 日 (木)	16:00～17:30
		会 場	: オンライン開催	
教育委員会	(1 月度)	日 時	: 1 月 19 日 (水)	15:30～17:00
		会 場	: オンライン開催	
資格委員会	(1 月度)	日 時	: 1 月 27 日 (木)	12:00～13:00
		会 場	: オンライン開催	
国際・交流委員会	(1 月度)	日 時	: 1 月 6 日 (木)	17:00～18:00
		会 場	: オンライン開催	
広報委員会	(1 月度)	日 時	: 1 月 27 日 (木)	16:00～17:00
		会 場	: オンライン開催	
顕彰委員会	(1 月度)	日 時	: 1 月 25 日 (火)	15:00～16:00
		会 場	: オンライン開催	
企業部会幹事会	(1 月度)	日 時	: 1 月 5 日 (水)	17:00～18:00
		会 場	: オンライン開催	
PR業部会幹事会	(1 月度)	日 時	: 1 月 18 日 (火)	16:00～17:00
		会 場	: オンライン開催	

新年にあたって

公益社団法人 日本パブリックリレーションズ協会
理事長 畔柳一典

あけましておめでとうございます。2022 年は日本パブリックリレーションズ協会（以下、PRSJ）にとって、例年にも増して重要な年になると思っております。それは、昨年 6 月に発表した「新中期計画」が今年から本格的に実働期に入るからです。「新中期計画」は、2021 年～2023 年度までの協会の経営・活動計画で、一昨年に発表した「2020 年 PRSJ 宣言」を起点として策定しております。

そのテーマは、「PR パーソンからパブリックリレーションズ・プロフェッショナルへ」です。PRSJ はパブリックリレーションズがソーシャルイノベーションに貢献できるように進化するために、「パブリックリレーションズ・プロフェッショナル」という新たな人材像を設定しました。具体的には、社会を俯瞰して伝えるべき事実を特定し、ターゲットの志向に合致するコンテンツを創り、あらゆる伝達手段を有機的に組み合わせてターゲットとの関係性を構築する、統合的なパブリックリレーションズを遂行できる人材です。私は、これらを実践することのできるキーパーソンこそが「パブリックリレーションズ・プロフェッショナル」と称されるべき人だと考えます。また、企業においては、「経営に資する広報」という視点で、パブリックリレーションズの持つ本質とそこに携わる方々の役割を、再認識する契機にいただければ幸甚です。

協会としては、今後、「パブリックリレーションズ・プロフェッショナル」をより明確化していくために、スキルセットの確定、ロールモデルの発掘、カリキュラムの開発等を行っていく所存でおります。また、会員の皆様に参加していただくプロジェクトを組成することも考えております。プロジェクトへの積極的な関与をお願いいたします。

この人材像は現在の状況とは違和感が大きいかもしれません。しかしながら、ギャップがあるからこそ力強い進歩も期待できると考えております。

引き続き、皆さまのご協力とご支援をお願い申し上げます。

※「新中期計画」、「2020 年 PRSJ 宣言」の詳細をテキストと動画で PRSJ 協会 HP に掲載する予定です。

「PRアワードグランプリ2021」 表彰式・プレゼンテーション オンラインでライブ配信

今年の「PRアワードグランプリ2021」表彰式・プレゼンテーションは、2021年12月14日（火）12時30分から、東銀座の時事通信ホールで開催されました。プレゼンテーションと表彰式の模様はオンラインでライブ配信し、多くの方にご視聴いただきました。



畔柳理事長のご挨拶、井口審査委員長からの講評につづいて、グランプリ、ゴールド、シルバーの各受賞エントリーの代表者から、企画の意図や実現に至るプロセス、成果まで、受賞事例の全体像が把握できるプレゼンテーションを実施していただきました。

今年度のPRアワードグランプリでは「『まてりある's eye』～若者が人生を変える 物質科学広報プロジェクト～」(エントリー会社：国立研究開発法人 物質・材料研究機構、事業主体：国立研究開発法人 物質・材料研究機構)をグランプリとして選出いたしました。同時に、「ゴールド」3エントリー、「シルバー」に5エントリー、「ブロンズ」に5エントリー、さらに奨励賞として1エントリーを選出しています。

「PRアワードグランプリ2021」の受賞エントリーの内容は、2022年2月に開催予定の「PRアワード受賞事例公開セミナー」や6月に発刊予定の「PR Yearbook 2022」、協会のウェブサイトなどで紹介していく予定です。

今年度は全73エントリーの応募がありました。多数のご応募をいただき誠にありがとうございました。来年度のエントリーもお待ちしております。





＜井口 理・審査員長の講評コメント＞

コロナ禍を経ての2回目のPRアワードグランプリは今年も前年とほぼ同数のエントリーをいただき、胸をなで下ろしておりました。昨年同様、危機を機会に置き換えて各種の前向きな取り組みがなされていたようで喜びに堪えません。特に今年のエントリー募集時に「地味な活動でも中長期にわたる真摯な取り組みによって達成される成果もある」と申し上げたところ、単年の話題づくりに留まらない、その積み重ねと継続の力を感じさせる案件が数多く手を挙げてくれました。これもまた他のアワードとは異なる、PRならではの取り組みの特徴を物語るものとして非常に見どころのある内容でありました。

グランプリを獲得した国立研究開発法人「物質・材料研究機構（NIMS）」様の活動は、7年にわたる若者とのリレーション構築の模索の果てに辿り着いた成果をお話いただきました。輸出額で自動車と肩を並べる素材産業ですが若手科学者人口の減少は由々しき問題でした。宇宙やロボット、ITといった領域と比べ地味に思われがちな素材産業に、どう関心を持ってもらえばいいのか、その自問自答の末に研究成果のみに頼らないもう一つの価値である「科学が持つ、人を感動させる力、発見のわくわく感」をフィーチャーし伝えていくことに注力。今や若年層向けのトップメディアとも言えるYouTube上でその魅力を伝えていくプラットフォームが整備されています。自分本位でなく、見る側の視点に立ったコンテンツを準備、加工して提供することで真に楽しませ、記憶に残す。そんなコミュニケーション環境が段々と醸成されていったのだと思います。またそのコンテンツをオープンソースとし、複数の科学館や高校・大学の授業でも活用してもらうなど、まさに重要ステークホルダーをハブにしてコンテンツが行き渡る仕組みが起動し効果を後押ししました。結果、コンテンツの視聴回数はJAXAの10倍を数えるなど、派手目の研究領域にも大きく優る成果を生み出しています。なによりエントリーシートにあった「代理店等の力なしに、すべてを研究所職員のみで遂行した、材料分野の危機感と情熱のみをエネルギーとする自前の長期プロジェクトである」の言葉にやられてしまいました。まさに広報・PRの力を信じ、自らやりきるその覚悟と忍耐力に頭が下がる思いです。プレゼン時の「これが同様の研究機関などに知れわたり、各所が広報・PRに目覚めるそのきっかけになれば」という言葉に審査団も涙したものです。

私が審査員長を務めてきたこの3年。2019年度グランプリの大阪・茶山台団地がその過疎化に対して住民と共に再生に取り組んだ地域プロジェクトや、2020年度のダブルグランプリ、ダイキン工業様が長年掲げてきた企業スローガン「空気で答えを出す会社」をまさに具現化する活動でコロナ禍に成果を上げた事例と、井之上パブリックリレーションズ様がPR会社の果たすべき役割としてコロナ禍のリスク管理初動マニュアルを無料配布した事例、そして今回。各年の非常に象徴的な取り組みを審査員の方々との徹底議論を通じ、最終的には全会一致で納得感のある選出ができたと自負しています。またそれら事例のエッセンスがしっかりと理解され、引き継がれ、各者のエントリーに見え隠れしていることもうれしい限りです。

日本パブリックリレーションズ協会がこのアワードを主催・継続されている本来的な意味と意義が、これからも果たされることを信じてやみません。毎年言わせていただいておりますが、今年も審査を通じて自身がたくさんのことを学べたことにも感謝しております。

<受賞者コメント>

グランプリ：受賞エントリー（1エントリー）

- 作品名：「まてりある's eye」 ～若者が人生を変える 物質科学広報プロジェクト～
- エントリー会社：国立研究開発法人 物質・材料研究機構
- コメント：研究所員だけでの試行錯誤でした。これで良いのか、確信もなかった私たちに大きな自信を与えてくださり本当に感謝しています。



ゴールド：受賞エントリー（3エントリー、エントリー登録順）

- 作品名：東南アジアの「移動不安」という社会問題を解決するPR装置「Anti-Virus Mobility」～空気清浄技術×配車アプリ Grab～
- エントリー会社：(株)博報堂
- コメント：現在もウィルスの脅威に対峙し続ける世界中に、nanoeX 広報を通じて貢献していきたいと思っています。



- 作品名：パラスポーツの普及を通して社会を変革する PaRa Transformation(PX)
- エントリー会社：(株)電通 PR コンサルティング
- コメント：パラスポーツの世界に飛び込んでみたら、「パブリックリレーションズ」がもっと好きになりました！



- 作品名：コロナ禍の芸術家を救え！
オンライン上のアートの可能性を拓ける「東京藝大アートフェス」の挑戦
- エントリー会社：(株)電通 PR コンサルティング、
(株)電通、浜島デザイン(株)
- コメント：コロナ禍で不要不急とされたアートの世界。困窮に陥り喘ぐ若手芸術家のサポートに、PR の力とその共感力を活かすことができ嬉しい限りです。



シルバー：受賞エントリー（5エントリー、エントリー登録順）

- 作品名：若者の意思をくじく“3つの不”の解消と、投票啓発に挑む「学校総選挙プロジェクト」
- エントリー会社：(株)パブリックグッド
- コメント：ご協力頂いた社内外の皆様には感謝しています。
これからも様々なテーマで若者の声を届けて行きます。ありがとうございました！

- 作品名：パンテーン「#PrideHair」
- エントリー会社：(株)マテリアル、(株)グレイワールドワイド

- 作品名：不妊当事者の声で新しいあたり前を創る「不妊治療の保険適用」実現に向けて
- エントリー会社：(株)オズマピーアール
- コメント：地道に目の前のことをやってきた活動を表彰頂き、名誉ある賞を頂いたこと、本当に光栄に思います。松本 亜樹子（NPO 法人Fine 理事長）

- 作品名：京都大学オンライン公開講義「立ち止まって、考える。」
～ウィズコロナの社会を見据え、学びの機会をオンラインで共有するプログラム～
- エントリー会社：猿人 ENJIN TOKYO
- コメント：コロナ禍においてPRの果たせる役割は益々大きくなっていると思います。
今後も社会に価値のある体験を提供できるよう力を尽くしていきたいと思います。

- 作品名：健康経営の隠れた課題「“みえない多様性”に優しい職場づくりプロジェクト」
- エントリー会社：(株)プラップジャパン
- コメント：本プロジェクトを通じて人知れず我慢しながら働く人々に寄り添う働きやすい職場・社会づくりにコミュニケーションの力で貢献していきます。



ブロンズ：受賞エントリー（5エントリー、エントリー登録順）

- 作品名：地方創生に「住民を奪い合う」移住施策から、住んでなくても「知恵を分けあう」
新しいかたちの市民(=リモート市民)づくりへ
日本初！自治体が運営する移住の共創型オープンプラットフォーム「リモート市役所」
- エントリー会社：(株)オズマピーアール
- コメント：地域の持続的な街づくりにつながる今回の受賞を励みに、佐久市はもちろんのこと、ほかの自治体でもリモート市役所が活用されるよう取り組みを広げていきたいと思っています。

- 作品名：花業界からの新提案！
“祝いそびれ”に花贈りを「Okuléte gommen(オクレテゴメン)」プロジェクト
- エントリー会社：(株)電通
- コメント：これからもお花贈りを通じて笑顔をたくさん作っていききたいと思っています。この度はありがとうございました。

- 作品名：“不安な時代にも「はじめる人」を応援！”
メルカリ初のオーディション開催、体験価値提供へ
- エントリー会社：(株)メルカリ
- コメント：栄誉ある賞をいただき、ありがとうございます。受賞のお知らせをいただき、コンサート関係者一同感謝しております。

- 作品名：「あまらぶ」シティプロモーション～since2013～
- エントリー会社：(株)オズマピーアール
- コメント：素晴らしい賞を賜り、ありがとうございます。 これからも地域の魅力を伝え、愛に溢れるまちづくりに貢献してまいります。

- 作品名：メルカリの原理原則を明示し、信頼を築く「マーケットプレイスの基本原則」の策定
- エントリー会社：(株)メルカリ
- コメント：今回の受賞を大変光栄に思います。今後も外部と対話を重ねながら、よりよいサービス運営に努めて参ります。

奨励賞：受賞エントリー（1エントリー）

- 作品名：PRをDXして日本の広報を変える - PRオートメーション
- エントリー会社：プラップノード(株)
- コメント：すばらしい賞をいただき、チーム一同とても感激しています。より高いレベルのイノベーションを起こせるよう精進します。



今回から新しくなったトロフィー

日本PR大賞が決定！！

「パーソン・オブ・ザ・イヤー」 国連広報センター所長 根本かおる氏
「シチズン・オブ・ザ・イヤー」 COVID-19 多言語支援プロジェクト

2021 年度日本PR大賞「パーソン・オブ・ザ・イヤー」「シチズン・オブ・ザ・イヤー」の受賞者が、外部有識者および会員の皆様方に投票していただいた結果を基に、顕彰委員会での最終審議を経て決定いたしました。日本PR大賞「パーソン・オブ・ザ・イヤー」に国連広報センター所長の根本かおる氏を、日本PR大賞「シチズン・オブ・ザ・イヤー」に COVID-19 多言語支援プロジェクトをそれぞれ選出、表彰いたします。

日本PR大賞は、「パーソン・オブ・ザ・イヤー」としてパブリックインタレスト（公益）に貢献し、かつ話題性、発信力の高さや共感の醸成など、パブリックリレーションズの視点から、この年に最もPRパーソンとして活躍した人を、また「シチズン・オブ・ザ・イヤー」には、長年にわたり企業や市井で独創的な広報・PR活動を実践し、広く社会や地域あるいは団体の発展に寄与し、奨励に値する成果を収めた個人または組織を、それぞれ表彰するものです。

1998 年に日本PR大賞として創設して以来、年 1 回の表彰を行っています。

なお、本年度の日本PR大賞「パーソン・オブ・ザ・イヤー」「シチズン・オブ・ザ・イヤー」両賞の選考・授賞理由については次のとおりです。

【日本PR大賞「パーソン・オブ・ザ・イヤー」】

受賞者：根本 かおる氏（国連広報センター所長）

受賞理由：国連広報センターは、2015 年の国連サミットで採択されて以来、持続可能な開発目標（SDGs）の日本における普及広報活動をさまざまなステークホルダーやオピニオンリーダーを巻き込んで展開し、SDGs の重要性についての認識を高めている。根本氏は同センターの所長として広報活動全般のディレクションを行うとともに、自らメディアや講演会などに登場してダイレクトに SDGs の重要性を訴求している。目標年となる 2030 年までの「行動の 10 年」という新たなフェーズに入り、社会の仕組みレベルの変革が急がれる中、根本氏が率いる国連広報センターが SDGs の達成に向けての大きなムーブメントをつくることの期待を込めて、根本氏を 2021 年度のPRパーソン・オブ・ザ・イヤーとして選定する。

【日本PR大賞「シチズン・オブ・ザ・イヤー」】

受賞者：COVID-19 多言語支援プロジェクト

受賞理由：COVID-19 発生以来、自国に戻ることでできない多くの在日外国人がコミュニケーションの不安を抱えている中で、多言語支援という課題に対して迅速に対応し、継続的に支援を行っている姿勢がシチズン・オブ・ザ・イヤーとしてふさわしい。

なお、1 月 20 日（木）開催される「新春PRフォーラム 2022」で受賞者からメッセージをいただく予定です。（p11 参照）

「新春PRフォーラム 2022」1 月 20 日にオンラインライブ配信

すでにご案内のとおり、新年 1 月 20 日（木）に「新春PRフォーラム 2022」をオンラインで開催いたします。

まず、第一部 特別講演として、名和高司氏（一橋大学大学院 経営管理研究科 客員教授）にご講演をいただきます。講演テーマは「パーパス経営とパブリックリレーションズ」です。

続いて第二部として、日本PR大賞「パーソン・オブ・ザ・イヤー」「シチズン・オブ・ザ・イヤー」のご紹介となります。

2021 年度「日本PR大賞 パーソン・オブ・ザ・イヤー」は根本かおる氏（国際連合広報センター所長）、「日本PR大賞 シチズン・オブ・ザ・イヤー」は、COVID-19 多言語支援プロジェクトに決定しました。両賞ともに、受賞者からメッセージをいただく予定です。

新年でご多忙のことと存じますが、会員の皆さまの積極的なご参加をお待ちしております。

なお、本フォーラムは非会員の方も参加可能です。

記

■開催日時：2022 年 1 月 20 日（木） 16：00～17：30（）

■開催方法：オンラインライブ配信

※お申込み受付完了後に届く申込確認メールに視聴 URL を記載しております

※システムの都合により視聴用 URL が変更になりました。1 月 13 日までにお申込みいただいた方は
確認メールに記載の視聴用 URL が変更になるため、個別に変更のメールをお送りしております。
メールが届いていない場合は mail@prsj.or.jp までお問合せください。

■実施内容：

□第一部：特別講演 16：00～17：00

テーマ：「パーパス経営とパブリックリレーションズ」

講 師：名和高司氏（一橋大学大学院 経営管理研究科 客員教授）

□第二部：2021 年度日本PR大賞のご紹介 17：00～17：30

－ 「パーソン・オブ・ザ・イヤー」

－ 「シチズン・オブ・ザ・イヤー」

■対 象：どなたでもご参加いただけます。

■お申込み：下記URLからお申込みください。

<https://prsj.or.jp/event/forum2022120/>

【名和高司氏のプロフィール】

東京大学法学部、ハーバード・ビジネス・スクール卒業（ベーカーズカラー授与）。

三菱商事を経て、マッキンゼーで約 20 年間勤務。

自動車・製造業プラクティスのアジア地区ヘッド、デジタル分野の日本支社ヘッドなどを歴任。

2010 年より現職、問題解決、イノベーション、グローバル戦略、CSV 経営、デジタル戦略、コーポレートガバナンスなどの講座を担当。

デンソー（～2019 年まで）ファーストリテイリング、味の素、SOMPO ホールディングス（いずれも現在も）などの社外取締役、ボストン・コンサルティング・グループ（～2016 年まで）、アクセンチュア、インターブランド（いずれも現在も）などのシニアアドバイザーを兼任。2014 年より、「CSV フォーラム」を主催。2021 年より、京都先端大学客員教授を兼任。

『パーパス経営』、『経営変革大全』、『全社変革の教科書』、『CSV 経営戦略』、『稲盛と永守』など著書多数。

広報・PR実務講座 2021

広報・PRスキルアップ実践講座④ <デジタル危機対応> 「デジタルリスクの解析に基づくネット炎上防止のポイント」

教育委員会

当協会では、今年度第4回の「広報・PRスキルアップ実践講座<デジタル危機対応>」として、広報・PR部門がネット炎上を防止するためのポイントを学ぶ「デジタルリスクの解析に基づくネット炎上防止のポイント～安全なSNS運用のために広報・PR部門がとるべき対応～」をオンライン開講します。

インターネットの普及を背景としたメディア環境の変化は、コミュニケーションを仲立ちとしてステークホルダーとの良好な関係性構築をミッションとする広報・PR活動にも大きな影響を及ぼしました。パブリシティによる情報発信のみでは十分な広報的成果を望むべくもなく、マスメディアと連携させながら、ステークホルダーの共感や支持を得るため、多彩なSNSやWebを効果的に活用すること・・・、それが広報・PR担当者にとって重要な課題となっています。

デジタルメディアの利用が進むにつれ、広報・PRは新たな問題に直面することになりました。自社に関係する行動や発言を契機にネット上で批判が集中、拡散する状態、それはネットにおける「炎上」です。デジタルメディアの活用をはかる広報・PR担当者にとって、「炎上」への対策は避けては通れぬ不可欠の課題となっています。

なぜ、「炎上」が発生してしまうのか？商品の不備・欠陥、不謹慎な発言、バイトテロ、ネガティブ報道など、その原因は枚挙にいとまがありません。ただ、ふと見逃していた「炎上」が社会的に注目される「大炎上」へと燃え上がった時、渦中の企業はなすすべもなく翻弄される事態に陥ります。「炎上」の成行きによっては、それまで築き上げたレピュテーションやブランドが著しく毀損され、時には業績にも影響を及ぼす事態になりかねません。

テクノロジーの進展によって発生する新たなデジタルリスクへの対処が広報・PR部門には求められています。大事なことは、平時から可能な限り「炎上」発生を抑制し、万が一の時には混乱の極小化に向けて適切に対応すること。多様な価値観や風潮をはじめさまざまな原因に基づく「炎上」を解析し、そこから発生につながる条件やきっかけについて理解を深め、そして平時から注意を怠らないことが重要です。

本講座では、デジタルリスクマネジメントに豊富な実績を持つ株式会社エルテスから、同社の「デジタルリスクラボ」の責任者を務める江島周平氏を講師に迎えます。

江島氏には、SNSで炎上が発生するさまざまなパターンを解析・整理していただき、その発生の仕組みや原因について、さらに未然に「炎上」を防止するため広報・PR部門が平時からいかに考え対処を準備すべきか、そのポイントを具体的に解説いただきます。



「炎上」について理解を深め、発生防止に向けた広報・PR部門の対応を学ぶ本講座。みなさまの受講をお待ちします。

講座の詳細については、下記URLの案内ページをご覧ください。（1月中旬公開予定）。

<https://prsj.or.jp/event/digitalrisk/>

（事務局・真部）

2021 年度第2回なでしこカウンスル

「東京 2020 オリンピック・パラリンピックがもたらしたレガシー ～ 日本における多様性・人権への視点は変わるのか？」

2021 年 11 月 26 日(金)オンライン開催

国際・交流委員会

女性会員を対象とした「なでしこカウンスル」の本年度第2回は、冬季パラリンピック アルペンスキー 金メダリストの大日方邦子さんを講師に迎え、11 月 26 日に Zoom ウェビナーで実施されました。コロナ禍のもと開催された東京 2020 オリンピック・パラリンピックは日本に何をもたらしたのでしょうか。今回は、ジェンダー、障害の有無をはじめとする多様性の領域でオリンピック・パラリンピックが残したレガシーに加え、今後の私たちに求められる視点について、メッセージをいただきました。参加者としての気づきも含めて以下の通りご紹介します。

1 パーソナルストーリー（自己紹介）

大日方さんは3歳のときに交通事故で右足を切断し、左足にも障害が残っています。小学生だった40年前は、障害があれば特別支援学校（当時は養護学校）にという時代でしたが、地元の小学校に通い、体育の授業や運動会にも参加したそうです。7歳のとき、泳げるようになったら体育の授業に参加してよいと言われて始めた水泳がスポーツとの出会い。その後、高校2年生から始めたチェアスキーは、偶然目にしたものだそうです。パラリンピックはアルペンスキー競技で94年リレハンメル大会から5大会連続出場。98年長野大会で冬季大会日本人初の金メダルを獲得。メダル数通算10（金2、銀3、銅5）は冬季大会日本人最多となっています。



撮影/堀切功

長野大会での金メダルは、パラアスリートとして初めて新聞一面トップを飾りました。パラスポーツがリハビリの延長ではなく競技スポーツとして認められた証です。しかし、素晴らしいという声がある一方で、障害を晒し者にしているのか、障害を商売にするのはいかなるものかと言われることを恐れる企業担当者もまだいたそうです。大日方さんの後、しばらくなかったパラアスリートの新聞一面報道も、今回の東京大会での金メダルで次が出ました。

大日方さんは選手としてのキャリアと並行し、大学卒業後、日本放送協会（NHK）に入局し、教育番組などのディレクターとして勤務しました。その後、選手と仕事の両立や、スポーツビジネスにより深くコミットすべく、電通パブリックリレーションズ（現電通PRコンサルティング）に入社し、企業をはじめとするクライアントにダイバーシティ&インクルージョン（D&I）の領域で、アドバイスを提供。また、冬季パラリンピック・バンクーバー大会を最後に国際試合から引退して以降、後輩選手の育成や競技団体経営に従事しています。現在はスポーツ庁スポーツ審議会会長代理、スポーツ基本計画部会長、国土交通省交通政策審議会委員、東京都スポーツ振興審議会委員など、各方面で有識者としても活動されています。平昌パラリンピックでは、女性そしてパラアスリート出身として初の日本選手団団長を務められました。また、東京 2020 オリンピック・パラリンピックでは、選手村の副村長も務められました。

2 パラスポーツを通して見た世界の多様性

国際大会は文化の多様性を理解するチャンスです。選手団団長の役割や大会の雰囲気はもちろん、ボランティアの役割もずいぶん違い、平昌大会ではボランティアが会場で大きな声を出して盛り上げ、ロンドン大会でも選手と一緒に楽しみながら交流していたそうです。日本でそんなことをしたら、ボランティアは仕事に従事しなきゃならないのに楽しむなんてと苦言を呈されるかもしれません。

また、パラリンピック取材する日本のメディア人数は際立って多く、平昌大会では、発行記者証数のうち17%が日本向けでした。しかし同じような場所で同じような取材が行われる傾向にあります。画一的・表層的な報道から外れることがメディアリレーションでは重要です。その点、イギリス Channel 4 は、ロンドン大会をきっかけに、それまでの「障害がある人＝社会的な弱者」というステレオタイプを覆しただけでなく、パラアスリートが凄すぎて逆に一般の人達との垣根ができるのではという議論を生むほどインパクトのある動画を作り続けています（Channel 4 の専用ページは以下参照）。

Meet the Superhumans (2012 London)

<https://www.youtube.com/watch?v=tuAPPeRg3Nw>

We're The Superhumans (2016 Rio)

<https://www.youtube.com/watch?v=IocLkk3aYlk>

Super. Human. (2020 Tokyo)

<https://www.youtube.com/watch?v=0jIP9EFbcWY>

このほか、英国ではバリアフリーが進んでいて、バスの昇降スロープが自動的に出てくるようになっていました。大日方さんは日本に帰ってこれをバス会社に提案したそうですが、その反応は、「使う人が少なくてコストが合わない。安全性の点でもスロープは手で出した方がよい。」というものだったそうです。日本では「人が手を貸すのがよい」という意識があるからかもしれないとのことでした。



3 2020 東京オリ・パラがもたらしたレガシー

では、今回のオリ・パラは、私たちにどんなレガシーを残してくれたのでしょうか。IOC の定義では、レガシーにはスポーツ、社会、環境、都市、経済の5分野があり、それぞれについて計画するとされています。また、ポジティブなものやネガティブなもの、有形なものや無形なもの、たまたま残るものや意図して残すものなど、様々です。今回は「多様性と調和」に焦点を当てて説明いただきました。

まずスポーツの観点では、全員が自己ベストを目指し、金13個、銀15個、銅23個と、自国開催ということもあったかもしれませんが、アテネ大会に次ぐ過去二番目の総メダル数でした。下は14歳から上は50歳まで、幅広い世代がメダルを取り、花形競技の車いすバスケは史上初の銀メダルでしたが、あと一歩で金メダルというところまでアメリカを追い詰めました。車いすテニスの国枝選手への1億円の報奨金は、オリとパラが差を付けずに扱われたということであり、また、多くのパラアスリートが広告に起用されました。日本パラスポーツ協会の協賛企業数は10年間で5から33へと6倍になり、選手を雇用する企業も増えています。

大会運営においても、開閉会式でのキャスト710名中166名が障害のある人で、出演者は一般公募。障害のある人が安全安心に活動できるよう、トレーニングを受けたスタッフが要望を聞いてサポートするなど、障害のある人を迎えるための工夫がたくさん行われました。これらがレガシーとして継承されていくのが重要です。また、視聴率は開会式23.6%、閉会式20.6%と、オリンピックの半分程度に達することができました。

パラリンピックの報道は、サイクルはありつつも右肩上がりで、この後下がっても一定程度を維持していくには、話題性や新規性のある情報を発信し続けていくことが必要であり、数か月後の北京大

会での日本人選手の活躍が重要です。また、報道する側も障害のある人達がリポーターとして活動しました。東京大会終了後に見なくなってしまったのは残念であり、そういった方々が日常的にいるのが普通という社会にしなければなりません。

設備の面では、パラアスリート優先のオリパラ共通のトレーニング施設が2019年9月に完成したほか、街では点字ブロックやエレベーターが整備、ホテルや旅館では客室入り口や浴室トイレのドア幅が確保されるなど、東京大会に向けてバリアフリー化が進められました。一方で、障害を理由にスポーツ施設の利用を断られたり条件付きで認められたりした経験のあるパラアスリートの割合は、2016年の21.6%から2021年の21.3%へとほとんど変わっていません。施設側の理由は、前例がない、危ないんじゃないか、施設に傷がつくから使わせたくないといったものだったそうです。

このほか、ジェンダーの観点では、12人の女性理事が急に任命され、時間がない中で難しい面もありましたが、委員の間でよく議論し、事実に基づかない情緒的な記事が出たら公式に見解を示したりもしたそうです。また、大会直前には、IOCからジェンダー平等のためのガイドラインが発表され、国内では、大会組織委員会のジェンダー平等チームが日本語参考訳を公表しました。

東京大会は、不可能なことも工夫すれば可能になるという、発想を転換するヒントの詰まったパラリンピックを身近なところで見えるチャンスであり、それを見た多くの人の意識を変えることができました。次は行動を起こし、社会を変えていかなければなりません。

4 企業（広報担当者）に求められる視点

以上を踏まえ、多様性と調和のある社会にするために企業に求められる視点として、以下が挙げられました。

- アンコンシャスバイアスは誰もが持っていると感じること
- 多角的な視点や共感力を持つこと
- セグメンテーションには限界があり、みんな違っていい、むしろその方がいいこと
- 障害について、個々人に障害を乗り越える努力を求めるのではなく、社会全体で対処するように、発想を転換すること
- 心のバリアフリーとは実は思いやりや配慮ではないなど、問題の本質を理解して、コミュニケーションに活かすこと

5 Q&A

最後に参加者の質問に対し、ざっくばらんにお答えいただきました（関連する内容をまとめており、当日の順番とは変えています。）。

Q：東京パラリンピック閉会式のピアノ奏者が素晴らしい演奏をし、紹介がなかったのが片手だったことに気づけなかったが、こういったことは他にもあったのか。

A：演出側は、敢えて障害をクローズアップしないように意識していた。例えば自分では呼吸できないパフォーマーがいたが、舞台上に立ったら人は平等だと言っていた。障害のある人がいるのは当たり前ということが、D&Iを伝えていくのに重要。

Q：パラアスリートを別世界の存在に感じるの、知らず知らずのうちにexcludeしていたからだと思うが、今後はどのような行動を取っていけばいいのか。

A：遠い存在に感じたのは、無観客開催の影響もあったかもしれない。しかしそれは周りの人に無関心だからでもあり、いるはずなのに気づかないだけ。街でスマホから目を外し、障害のある人だけでなく、多様な人がいると知ることから始めればよい。

Q：バスの自動昇降サポートを実現するにはどこにコンタクトすればよいか。設備があれば使う人も増えるのではないかな。

A：使う人が増えれば作るというのは鶏と卵の問題。そこにニーズがないと思い込むことで、実はチャンスを逃している。例えばタクシーは、昔はセダン型ばかりだったが、今はだいたい乗りやすい形になった。そうすることで利用も増える。バスの昇降スロープは実現したいが、障害のある人が言うと文句を付けていると捉えられるため、是非一般の方に声をあげていただきたい。

Q：航空会社やホテルのバリアフリー状況は、日本と海外とでどのように違うのか。

A：日本と海外というより、ヨーロッパとアメリカとでだいぶ違う。バリアがあることを意識しなくて済むのが本当のバリアフリーだと思っているが、アメリカは法律があって、基本バリアフリー。一方、ヨーロッパは街並みが古いこともあって、思ったよりバリアフルだったりする。しかし、ヨーロッパでは、迷ったかもしれない、とウロウロしていると、通りがかった人が声をかけて助けてくれるなど、解決することが日本よりも多いように感じる。航空会社はだいたい一緒であるが、日本の会社は質が高く、今回の東京大会を受けてさらに質が上がっている。

Q：パラリンピックでもっとこうした方がよかったと思うことはあるか。

A：競技を直接見てもらいたかったし、アスリートに街に出て行って欲しかった。また、終わった後の盛り上げ方を終わる前から仕込んでおけばよかった。

Q：オリ・パラを2020年に開催できたらよかったこと、延期したからこそよかったことはあるか。

A：1年長く関心を持ち続けられたのはよかったが、終わって下がる関心をどのように継続するかが課題。

Q：パラスポーツや障害のある人について、メディアの捉え方が変わったと感じられた時期はあったか。

A：長野大会の開催された1998年が一つの分岐点。その後は四年に一度のサイクルで、毎回、障害を持った経緯から始まる。しかし今後は変わるのではないかと。

Q：今後、挑戦してみたいこと、取り組みたいことについて教えて欲しい。

A：スポーツビジネスは排他的な構造になっていて、限界がある。パラスポーツのメジャー化など、パラアスリートを起点に新しい価値を作ることに挑戦したい。

終始穏やかな語り口で、数々の経験に基づく様々な気づきを教えていただいた1時間半でした。今度は私たちが行動に移していく番です。街で周りをよく見て多様性を理解し、せっかく盛り上がった機運が維持・向上するよう、一人一人ができることをやっていくことが重要だと感じました。

大日方邦子氏プロフィール（2021年11月26日現在）

株式会社電通 PR コンサルティング 営業推進局 D&I コンサルティング部 チーフ・コンサルタント兼 ダイバーシティ&インクルージョンセンター長
公益財団法人日本パラスポーツ協会 理事
一般社団法人日本パラリンピアンズ協会 会長
特定非営利活動法人日本障害者スキー連盟 常任理事(強化本部長)
一般社団法人パラスポーツ推進ネットワーク 副理事長
著書：『壁なんて破れる』（2006年 日本放送出版協会）



司会進行：アリソン・アンド・パートナーズ 市瀬朱実

文責：農林水産省 渡辺裕子

主催：国際・交流委員会（委員長：ACAO SPA & RESORT(株)、パイオニア(株) 脇山亜希子）

正会員・個人会員限定

第218回定例研究会

「ハフポスト日本版」の新たな展開
～社会課題にも取り組むデジタルメディアの今後を展望する～

講 師: BuzzFeed Japan 株式会社
ハフポスト日本版 エディター
南 麻理江氏

第218回定例研究会は、12月3日（金）オンラインで開催しました。講師は BuzzFeed Japan 株式会社 ハフポスト日本版 エディター 南 麻理江氏。テーマは「「ハフポスト日本版」の新たな展開～社会課題にも取り組むデジタルメディアの今後を展望する～」でした。

PRSJ in Media

● 12月1日（水） 『月刊広報会議』（宣伝会議）1月号

『月刊広報会議』1月号における当協会の連載コラムで、当協会が進めている中期計画について記事掲載されました。

記事では、「PRパーソンからパブリックリレーションズ・プロフェッショナルへ」という基本方針をはじめ、コアメッセージが示された2020年11月の「40周年記念フォーラム」以降の経緯、パブリックリレーションズ・プロフェッショナルが備えるべき3つの能力、協会の今後の取組みなどについて紹介されています。

● 1月1日（土） 『アドタイ』（宣伝会議）1月1日号

『アドタイ』1月1日号に、当協会の畔柳一典理事長の年頭挨拶が掲載されました。

挨拶では、協会が進めている中期計画に触れ、計画が「2020年PRSJ宣言」を起点に作成されていること、「PRパーソンからパブリックリレーションズ・プロフェッショナルへ」のテーマのもとに設定された新たな人材像、さらに「経営に資する広報」というパブリックリレーションズに関する考えなどについて語られています。

[記事協力：株式会社内外切抜通信社]

編集担当より

本誌の内容に関するご意見・ご希望をお寄せください。
中身の濃い会員誌に育てていきたいとおもいますので、
よろしくお願い致します。

広報員会

E メール mail@prsj.or.jp

F A X 03-5413-2147

※ 禁転載